



木村 長敏 さん

Kimura Taketoshi

Profile

十和田市出身。平成21年12月、十和田バラ焼きゼミナールに入会。平成23年5月、2代目学長に就任する。相坂電気の跡継ぎとして勤務する傍ら、バラ焼きゼミナールの若き学長として十和田市のPR活動に奮闘する。34歳。趣味は釣り、野球。



大人になって、

こんなにひとつのことに

夢中になるとは思わなかった

— 想いはただひとつ

〃 十和田のまちを売る〃

今やその名を全国にとどろかせる十和田バラ焼きゼミナール（以下バラゼミ）。昨年11月に兵庫県姫路市で行われた全国Bリーグランプリでの8位入賞は記憶に新しい。「今回は前回の反省を踏まえ、十和田市のPRに重点をおいて臨みました。県立十和田西高生の協力もあり、十和田市を売った」という実感はあります」と、手応えを感じたと語るのは学長の木村長敏さん。

実家は電気工事業を営み、木村さんは跡継ぎ。「学生の頃は、十和田市に魅力は感じなかった。十和田市のことを知ろうとしてなかったんです」働き始めて自分が跡継ぎだと実感した頃に十和田市を知る大切さに気づく。「地元で働くからには、地元を愛する気持ちが必要です」と、話す。

バラゼミに入会してから、十和田市のことを知る機会が増えた。「十和田市を知ること、その良さを全国にPRしたいと思いました。バラ焼きは十和田市を売る手段のひとつ。バラ焼きを売るのはなく、十和田のまちを売らなくては」と、熱く語る。

昨年、特に印象に残ったことに被災地での炊き出しを挙げた。「バラ焼きは一度にたくさん量を作ることができません。少しでも多くの被災者のため、わたしたちができる支援が炊き出しでした」震災直後、傷跡も生々しい被災地に訪れたときのことを振り返る。「現地のかたに笑顔で接することができなかったです。

何て声をかけていいかもわからなかった」被災地の悲惨な現状に動揺を隠せなかった。それでも自分たちができることをしなければ、とバラ焼きを焼く手を止めなかった。「まだまだ持続的な支援が必要です。今後もバラゼミとしてできる支援を続けます」と、気持ちを引き締める。

5月にメンバーの推薦により学長に就任。プレッシャーを感じたという。「名だたる先輩方がいる中で年下の自分が学長でいいのかという不安もあったし、何より人前で話すことが苦手です」と、はにかみ笑う。

「舌校長の畑中さんをはじめとして、バラゼミのかたは本当に地元への想いが熱いんです。あまり話さないけど、内に秘めているかたもいる。まさか自分が大人になって、ひとつのことに対してこんなに夢中になるとは思わなかったです。同じ志を持つ仲間と熱く語り合ったり、なんかいいなって。世代交代の時期と言われましたが、まだ早い気持ちもあるのが正直なところ。先輩方の力はまだまだ必要です」

今年には西高の生徒のようにさらに市民を巻き込み、PR活動の輪を広げて行きたいと語る木村さん。「わたしたちの活動を見た市民のみならず自分たちもやるぞ！という想いを持っていただけるような活動をしていきたいです。今年もがんばります！」

2012年も十和田バラ焼きゼミナールの活躍が目が離せない！

